



# 大阪の 社会福祉

The social welfare in OSAKA



## 学生視点で被災地で学んだことを伝え、 震災の教訓を未来へつなぐ

▲インタビュー  
終了後の一枚

6・7面

大阪総合保育大学短期大学部 学生防災リーダーへのインタビュー  
大学生が取り組む防災活動

食べる食堂や保育所の実態には反対しないのだろうか。伝統って何なのだろうかと考えてしまう。

(右)

▼小さい時から、スプーンでどんぶり  
を食べることが当たり前になって  
いるのだ。そのうち日本の食卓から  
お箸が消えていくのだろうか▼夫婦  
別姓や同性婚を日本の伝統にふさ  
わしくないと反対する議員さんは、  
お箸を使わないでどんぶりのコメを  
食べる食堂や保育所の実態には反対  
しないのだろうか。伝統って何なの  
だろうか考えてしまう。



昼食を食べる時間  
がなかったため、駅  
前のファストフー  
ド店で牛丼を食べようと  
思った▼数年前、外国人を  
理由に正社員の就職試験  
を受けさせないことでニュースに  
なった店なので、抗議の意味を込め  
てしばらくその店には入っていな  
かった。ところがその日の店員は外  
国人ばかり。正社員より給与の安い  
アルバイトは外国人でもいいのだろ  
うか▼さらに店内を見回して驚い  
た。客の若者たちの誰もが牛丼をス  
プーンで食べている。カレーライス  
を食べるようにスプーンでどんぶりを  
食べている▼別の日、知り合いの保  
育園で昼食をごちそうになった。献  
立は辛い辛いマーボー丼だった。子  
どもだけでなく、大人のテーブルに  
も当然の様に箸はなく、子ども  
も大人もスプーンだけの食卓だった





ふらつと立ち寄れ、何かあればここに行こう」と  
思える居場所

# cafe de ひまわり

「cafe de ひまわり」は、毎月第3水曜日午前11時〜午後1時まで、港区社協1階のボランティア・市民活動センターフリースペース「fuku cafe」で開催しています。  
今回は、6月18日に訪問した時の様子や活動者の古島智枝子さん、川添美雪さんにインタビューした内容を紹介します。



▲cafe de ひまわり活動者の方々(古島さん:前列左から2番目、川添さん:前列右から3番目)

## 社協と活動者の思いが一致し、立上げ

取材当日は、地域に住む常連の方、区社協から情報提供された方、区社協へ相談に来た際にこの活動を知った方、デイサービスを利用する方など30人近くの参加がありました。



▲参加者による「懐かし」の歌謡曲のギター演奏があり、会場のボルテージがあがりました

また、カフェだけでなく、港第二育成園による手作り焼き菓子の販売やギターが得意な参加者による「懐かし」の歌謡曲の演奏などおこなわれ、曲のリクエストや、曲に合わせ手拍子などで盛りあがる場面もありました。偶数月での開催は、「おやじカフェ」として男性ボランティアも運営に関わるなど、さまざまな方々と連携して開催しています。



▲港第二育成園による手作り焼き菓子の販売

## 気軽に集い、つながりをつくることのできる居場所にした

活動者の川添さんは、「区社協に来た方が帰り際に、ふらつとカフェに立ち寄ってくださり、その後も継続的にカフェを利用していただけることがあります。また、「最近こんなことで悩んでいるね〜」と利用している方の声を社協職員へつなぎ、相談に応じ、解決につながったこともありました。ただ、いろいろ聞き過ぎると、この場所に参加したら何か聞かれる・話さないといけないとならないように、ゆるく関わり続けることも大切になっています。互いに近くで支えあっている安心感が、活動のモチベーションになっています」と語りました。そして、「中心となって活動している私たちにとっても、ここで集まってゆっくり話れる」居場所

所「であり、とにかく楽しんで取り組んでいることも、活動を長く継続できている理由の一つです」と言葉を続けました。

を取り戻し、社会復帰を果たしたこともありました。「人が気軽に集い、つながりをつくることのできる場をつくりたい」という思いから始まった活動なので、それが形になっていることがとてもうれしいです」と語りました。

活動が始まってから約9年。コロナ禍を乗り越え、「cafe de ひまわり」は現在に至るまで毎月開催しています。活動者の古島さんは、「長く家族以外との関わりがなかった方が、このカフェを通じて人とのつながり

「現在は、利用者のほとんどが高齢者ですが、今後は不登校の子どもも参加できるなど、より幅広い方が気軽に立ち寄れるようにしていきたいと考えています。



▲カフェに参加した方々で近況報告などの雑談をして過ごしました

また、人と人がつながるあたたかい居場所として、継続して運営しているよう、パトナッチができる後継者も探さないといいけません。これからも何かあった時はここに行こう」と思ってもらえるような居場所であり続けられるよう、尽力していきたいと思えます」と力強く言葉を続けました。



▲区社協職員も参加しているため、相談できる場にもなっています

## cafe de ひまわり

- 日時 ▶ 毎月第3水曜日  
午前11時〜午後1時
- 場所 ▶ 港区社協1階「fuku cafe」
- 対象 ▶ どなたでも
- 料金 ▶ 100円  
(飲み物、パンまたはお菓子つき)

## 参加者の声

- これまで出会うことがなかったが、この活動に参加したから出会えた方がいて、参加してよかったと思っています
- お友達とこの場所で月1回会う約束をしており、待ち合わせ場所としています。この歳になると、待ち合わせをする機会が減っているので、うれしいです
- 引っ越して来て、周りに知り合いがいなかったが、ここでギターの方と出会い、「毎月待っているよ」と言っただけ、演奏を聞きに参加しています。毎月第3水曜日を楽しみに過ごしています



# 他地域と情報交換し、さまざまな取組みを知って、地域福祉活動の発展へ 東住吉区集いの場づくりを考える会

東住吉区社協では、令和5～6年度の2年間で全14地域において地域懇談会を開催し、地域福祉活動に関わる方々が活動の意義や目的を確認しつつ、これから話し合う場としてすすめてきました。(地域懇談会の内容については、令和6年8月号(2・3面)・9月号(2・3面)で掲載しています)

これまで、各地域で話し合いの場を設けてきましたが、今回は地域を超えて他地域の活動者とも話し合える機会として、「東住吉区集いの場づくりを考える会」を開催しました。高齢者食事サービスやふれあい喫茶などの地域活動者を中心に、各地域の地区社協会長や地域連合振興町会会長、地域活動協議会会長へ参加を呼びかけ、開催した当日の様子を紹介します。

## 活動者同士で集いの場づくりを考える

7月4日午後1時～3時30分  
に、東住吉区民ホールで「東



▲区内全14地域の地域活動者等へ呼びかけ開催

住吉区集いの場づくりを考える会～高齢者食事サービス・ふれあい喫茶編～を開催し、120人を超える参加がありました。

当日は、地域福祉活動の重要性についての講話や活動の現状・課題についての事例報告、グループでの情報交換をおこない、これからの活動のヒントを得たり、他地域の取組みや工夫点、困りごとを共有するなど、相互に刺激し合える機会となりました。

## 集いの場の強み

第1部では、区社協の荻野和代地域支援担当係長から、令和5～6年度に各地域で開催した地域懇親会のふりかえりについて報告した後、大阪成蹊短期大学の鈴木大介先生からの講話、北田辺地域と鷹合地域から事例報告がありました。

講話で鈴木先生は、集いの場のいいところとして、「たくさんの人と出会い、交流でき、悩みを共有することで、支え合いの輪が広がります。日頃の生活のなかでも交流が生まれ、孤立感が軽減されることから、孤独・孤立、閉じこもり防止にもつながります。また、交流して関係性ができる」と、日頃の心配ごと、悩みを聞ける機会となり、地域福祉課題の発見につながります。そ



▲鈴木先生から集いの場の魅力について講話

うして掘り起こした課題の解決に向けて関係者・関係機関と協力することで、地域の福祉力の向上につながります」と話しました。  
続けて鈴木先生は、「集いの場を運営するうえで気をつけることとして、つながりを強要しないことも重要です。交流しなくてもその場にずっといられることも集いの場の条件です。そして、これからの『集いの場』に向けては、関わる人を増やしていく必要があります。増やしていくためには、まずは活動を知ってもらい、足を運んで踏み入れてもらい、『有意義な』時間を過ごさせて、『また来たいな』と思ってもらえる、このステップを踏んでいくことが大事です」と述べました。

## 新たな活動者及び参加者の拡大

事例報告では、2地域からそれぞれの取組みの工夫点や課題についての実践報告がありました。

鷹合地域ふれあい喫茶で活動している中元幸子さん、林ひろみさん、松永智代さんから、「5回行くと1杯無料となる」お楽しみ券や、座席配置はカウンター席をつくって1人でもゆつくりと過ごせるなどの工夫をしています。オーソドックスなメニューから、コーヒーフロートやメロンクリームソーダなど幅広く用意しています」と述べました。

また、3人から、「課題として、女性部の限られたメンバーだけでは厳しく、人手不足になっていることや、若い方が地域活動にもっと参加してほしいなどがありましたので、チラシを作成したり、活動者から『ボランティアしませんか?』と口コミで呼びかけたことで、新たなボランティアが15人増え、参加者も増えていきます。新しいボランティアの方が負担に感じないよう、活動終了後にはふりかえり会を設け、活動の中での困りごとを聞くなど、全員が楽しめる活動となるよう、試行錯誤しながら取り

組んでいます」と話しました。

## 住民の得意を活かせる居場所

次に、北田辺地域の岡野美保子さん、服部照子さん、内山怜子さんから、高齢者食事サービスにおける実践報告がありました。「コロナ禍の影響を受け、テイクアウトの時もありましたが、令和6年4月から会館での会食に戻し、現在約70人の参加があります。活動者は40～80代と幅広い年代で活動しています。私たちの地域では、みんなの得意・趣味・思いを活かしたいと考えて取り組んでいます」と話しました。

続けて3人から、具体的な取組み内容として、「折り紙が得意な方から参加者へプレゼントしたり、絵を描くことが得意な方にはメニュー表のお品書きや季節の水彩画を描いていただいています。また、エレクトーンが得意な町会長が演奏したり、カラオケが得意な方が先導して季節の歌を参加者と一緒に歌ったりしています。活動者との会話を楽しみに参加される方もおり、「食べる。だけではない、いろんな方の居場所になるように工夫しています」と語りました。

## 活動者同士が語り合いつなげる機会

第2部では、令和5～6年度に作成した地域懇談会の資料を用いて、「いいなと思ったこと、地域で取り組んでみたいこと」「気になること・困っていること」と2テーマでグループワークをおこないました。各グループで自己紹介した後、情報共有し、「働き世代は仕事で忙しいため、関わってもらうことがなかなか難しく、どのようにアタックしていけばいいか」「私の地域では、季節を感じられるもの(お菓子やお花など)を準備し、目で見ても楽しめるようにしているよ」「男性の参加者が少ないため、



▲グループワークで他地域と情報交換し、取組みの工夫や課題を共有しました

## 他地域と情報交換することでの新しい視点

グループワークの各班の発表では、「現在活動している方の皆さんから広げ、地域活動に40代や50代の若い世代が担っている地域がありました。その地域が大事にしていることとして、まずは活動者が楽しく活動していること、何か楽しそうだから私も参加してみようかなと思ってもらえると聞いて勉強になりました」「普段からいろいろな方とつながっておき、タイミングを見計らって担い手へとつなげる戦略をとっていることを聞いて、参考になりました」「役員は75歳の定年制を設けている地域があり、若い方にとっては次の準備をしやすいなと感じていると工夫を聞いてよかったです」といったことなど共有されました。  
地域活動者同士が語り合っつなげることで、地域活動全体の機運が高まるとともに、支え合い・助け合いの輪が広がります。集いの場のみならず、福祉のまちづくりにについても考える機会となりました。

## 事例報告の様子



▲2地域から地域福祉活動の活性化に向けて取り組んでいる実践を共有



▲左から、鷹合地域の中元さん、林さん、松永さん



▲写真左から、北田辺地域の岡野さん、服部さん、内山さん

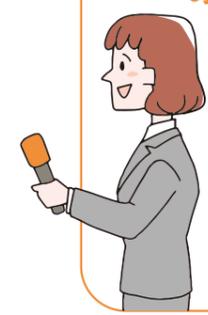


# 大学生の視点で被災地で学んだことを伝え、震災の教訓を未来へつなぐ 大阪総合保育大学短期大学の 学生防災リーダーの取り組み

大阪市東住吉区に位置する大阪総合保育大学短期大学部では、毎年4人の防災リーダーを選出して、宮城県へ行き、東日本震災の教訓を学んでいます。行って終わりではなく、現地で感じたことや学んだことを大阪に持ち帰り、学生目線で備えを発信しています。今回は、顧問である長橋幸恵先生と多田鈴子先生、学生防災リーダーとして活動している榎本涼風さん、竹原明美さん、後藤ななさん、柳瀬美羽さんに活動内容、活動への思い、今後の展開などについて、お聞きしました。



▲左から長橋先生、後藤さん、柳瀬さん、竹原さん、榎本さん、多田先生



はじめに、防災リーダーの活動に参加しようと思ったきっかけについて教えてください。

**榎本** 先生からお話を聞き、何でもやってみる精神なので、やってみようと思いました。また、防災について何も知らなかったですが、近年災害が多いことから、学んでおく必要があると思ったことも入った理由のひとつです。

**竹原** 友達から誘われたこと、私も防災について知らなかったのですが、大阪でも災害が起きた時のために、活動を通して学んだことを伝えていきたいと思い、参加することを決めました。

**後藤** 私も最初のきっかけは、友達に誘われてです。私は保育コースで、先輩から保育などの対人援助職に就くなら、この活動を通して、コミュニケーション力や防災の知識を身に付けることができ、将来役に立つと聞いて、参加しようと思いました。

**柳瀬** 先生たちからこの活動について聞き、防災について知るこ

とで、防災にあまり関心がない方へ防災の必要性を伝えていきたいと思ったからです。

取組みについて教えてください。

**長橋** 学生防災リーダーの活動では、東日本大震災で津波の被害を大きく受けた宮城県の南三陸へ例年行っています。南三陸311メモリアル、みやぎ東日本大震災津波伝承館、矢本はなぶさ幼稚園へ訪問し、当時の被害状況やどのように避難行動したかなど、震災を経験した方々の声を聞いたり、記録写真や映像の資料から、震災の教訓を学び、防災意識を高めています。

また、語り部バスにも乗車し、ガイドの方から被災地で起きた出来事を詳しく説明していただきながら、震災遺構となっている公民館や旧中学校などに訪れ、津波の威力を肌で感じ、自然災害の恐ろしさを実感しています。



▲矢本はなぶさ幼稚園の職員の方から、震災による園の被害、状況などについて直接聞きました

研修後は、東住吉区内の地域での活動(親子サロンや防災イベント等)や中学校での防災訓練、東住吉区社協がおこなう災害ボランティアセンターの開設・運営訓練などに参加し、防災の大切さを発信しています。

**後藤** 親子サロンでは、大体5〜10組の親子が参加しており、そこで少し時間をいただいで私たちの活動や防災について説明しています。乳幼児が避難する時に使う誘導ロープ(一本のロープに乳幼児が握る丸い持ち手が付いている)体験などもしていますが、1回目は私たちも発表することに慣れていないことから反応があまりよくなく、落ち込みました。2回、3回といういろいろな場所での発表経験を積み、最初に比べて全員上手くなっていると感じています。

**榎本** 地域の活動で発表した際に、参加していたおばあちゃんから、「シナリオの紙ばかり見て話すのではなく、聞いている人の顔を見て話した方がいい」と指摘を受け、全員で本当に落ち込みました(笑)。でも、あの経験のおかげで、発表がどんどんよくなっていると思います。

**竹原** 活動のたびにふりかえり会をして、どのように発表すれば聞いてもらえるか、先生含め

てみんなで考えました。

また、発表をしているなかで、感じることは、防災について知らない方が多く、南海トラフ巨大地震などのいざという時に備えてと言われても、なかなかイメージが湧かない、本当に起きるかもわからないため、油断している方が多いかなという印象です。

活動してうれしかったことは何ですか。

**柳瀬** 緊張して人前で顔を見て話すことができませんでしたが、質問されたら答えられるかなど、不安も感じていました。今では、



▲語り部バスで震災によって被害を受けた現地を訪問し、自然災害の恐ろしさを実感

東住吉区社協がおこなっている災害ボランティアセンター開設訓練や地域活動の際に、何度も人前で話す経験をしたことから、慣れてきました。自分の成長を感じることができた時はうれしかったです。

**後藤** 地域の防災イベントや企業での研修会などの時に、「私たちが考える防災バッグ」と題し、防災バッグの備えを見直す機会として実施してみたところ、参加した方からたくさん質問を受けることができて好評だった時です。さまざまな場所で発表した後に、参加した方から、「また来てほしい」とも言っていただけだ

こともうれしかったです。

先生方から見て防災リーダーの活動はどうですか。

**長橋** 東北にはもう10年近く行って、先方から声をかけていただけることもあり、毎年先輩から後輩へ思いを引き継いでいるため、この活動が応援される取組みになっているのだと感じています。

学生が地域などで発表すると、地域の高齢者の方々とつては孫の世代にもなるので、震災の経験から発表の仕方まで、いろいろ教えてあげようと思っただけです。これが歳の差がある学生から発信するよさだと思っています。最初は指摘を受けてなかなか落ち込んでいました(笑)。

ただ、教えていただいたことで、発表について考える機会となり、ブラッシュアップし、地域の方々から「若い子が防災について考えてくれていて、安心できる」と言っていただけでもありました。また、この活動は、防災はもちろんです、それ以外に活かせるスキルも身に付く活動です、そこも魅力です。

**多田** 被災してから、復興までの現地の変化は行かないとわからないと思います。例年現地へ

行っていますが、毎回違う気づきがあります。現地へ行って現地の方から、風景や資料などを見ながら、被害を受けた出来事を実際に聞くことで、肌で災害の恐ろしさを感じ、学びから防災意識を高めています。

初めは人前で話すことができなかったこともありますが、東北へ行ったたり、地域などで発表する回数を重ねるごとに成長し、堂々と発表している姿を見て、たくましくなっているなと感じています。卒業しても引き続きこの活動で学んだ防災を啓発してほしいと思っています。

今後この防災リーダー活動はどうなっていくか、してほしいと思いますか。

**竹原** 地域で発表している時に感じていることなのですが、参加者は、高齢者の方が多いので、一人ひとりの意識が地域の防災力を高めることから、若い方にも参加してほしいなと思っています。

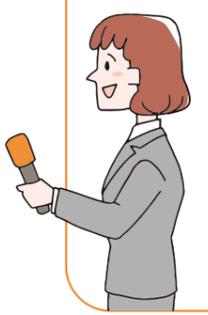
この防災リーダー活動で現地に行けて、震災について聞くだけでなく、実際に見たことで、感じるものがいくつかあります。学んだことを思い出し、終わらせず、就職する職場でも引き続き伝えていきたいと思っています。



▲東住吉区社協の災害ボランティアセンター開設運営訓練に運営側で参加



# 「子どもたちが安心して選択でき、自分を表現できるように」 くみなみのばたの会」



現在子どもを取り巻く環境は、少子化、核家族化、デジタル化、グローバル化、価値観の多様化など、昨今の社会的背景によって大きく変化してきています。近年は子どもの不登校や自殺、虐待についても増加傾向にあります。複合化・複雑化する問題に対し、包括的に子どもを支える取組みが必要とされています。

今回は、令和6年3月13日から中央区島之内地域で活動しているボランティア団体「みなみのばたの会」で代表を務める金力ラクさんに活動への思いや大切にしていること、今後の展開などについて、お聞きしました。

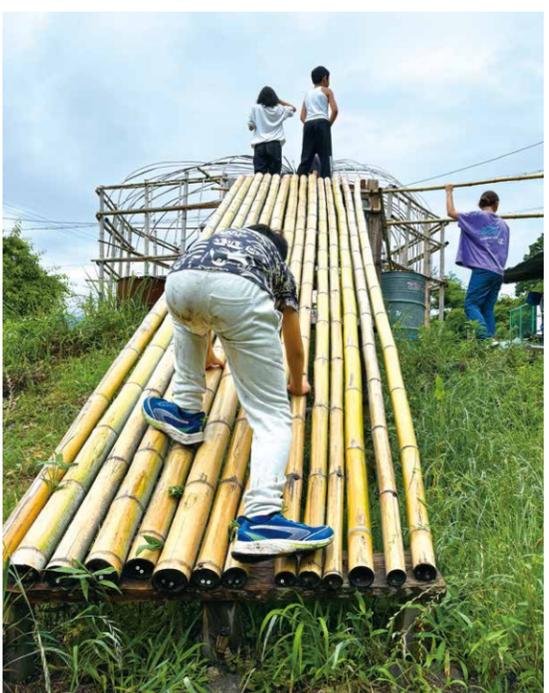


▲代表の金力ラクさん(写真:左)

子どもは「今」を生きているという視点が絶対に欠けてはいけません。と思っています。

また、この地域は多文化共生の視点と切り離せません。しかし、私たちがとってそれは単に外国にルーツを持つ子どもが日本人の子どもと同じことができるようになることを支援することではありません。

学力や日本語力も当然生きる力ですが、手厚い支援と称して同じことができるようになることを強いるのではなく、同じじゃないままでも生きられるように環境を調整することが先だと思っています。障がいのある子どもも同様です。



▲自然に触れながら、目一杯遊びを楽しむ子どもたち

たちが子どもたち一人ひとりの多様な在りようを否定せず「何をしてもいいし、どう過ごしてもいい」プレーパークや遊びを中心にした活動を始めたいと思いました。

**活動に取り組む原動力について教えてください。**

金 子どもと会えることです。日本では、昨年529人の子どもが自ら命を絶ちました。私も「もうだめだ」と、子どもから連絡がきて走ったことがあります。なんとかその子どもは生き延びてくれました。でも、同じ時に別の場所で別の子どもが自ら命を絶っているのです。小さな活動ですが、子どもと会えることが一番の原動力です。

**まずは、団体名の由来について教えてください。**

金 地域のなかにフィリピンにルーツを持つ子どもが多く、フィリピンの公用語の一つであるタガログ語で子どもを意味する「bata(ばた)」から取りました。私たちにとっては「地域の子どもを集い」「子どもが主役の集い」と言った意味合いがあり、活動を「子ども会」と呼ぶ子どももいます。

**取組みについて教えてください。**

金 活動はこれまで主に、子どもを対象とした※プレーパークや自然体験活動をしてきました。他にはハイキングや3月にはお祝い会などをおこないました。基本的には子どもたちと会議の場を設けて、子どもたちが「やってみたい」と思ったことを一緒にやっています。同時に障がいの有無や国籍・ルーツ、不登校などの状況に関係なく、ありのまま「で過ごしたいように過ごせる活動でありたい」と思っています。取



▲工具を使って、竹の弓づくり

**活動するなかで、大切にしていることや意識していることを教えてください。**

金 特に意識していることは、大きく2つあります。1つ目は、子どもが「自分で選ぶ」「自分で決める」「この自己選択と自己決定を尊重して、活動しています。例えば、プレーパークでの火や工具を使った遊びには危険がつきものです。しかし、リスクや失敗から学ぶ機会もあります。したがって、大人がすべての段取りを組む、リスクや失敗を排除した活動ではなく、余白や隙間を残しながら活動をしています。

2つ目は、「待つ」ことです。当事者にとって「自分で選ぶ」「自分で決める」ことはそこに生じる葛藤や結果も引き受けることでもあります。準備も含めた活動のなかで、自分の考えや気持ちをもとめて表現するにも一人ひとりのペースがありますので、意思表示するまで待つことも私



▲生駒山でのハイキング

組みとしては特別なことはありません。1年間に10回もない活動ですが、毎回20人近くの子どもが参加しています。

また、つながっている家庭の子育てに関する相談に対応することも増えてきました。障がいを持つ子どもの子育てや学校に窮屈さを感じている子どもの親の相談を聞き、小さい組織の私たちがだけで対応できないことは、関係先につないでいます。

**金さんから見ると、島之内地域はどのような地域だと感じていますか。**

金 島之内地域は、学習支援団体や子ども食堂がいくつもあり、民間でも学習・進学指導などをしながら学校を補完する活動が盛んで、特殊な強みを持った地域です。「学力」や「日本語力」を主語にすると、ひとり親や外国にルーツを持つ子どもが多いこの地域



▲昼食作り

たちの役割だと考えています。「与える」より「奪わない」方がより難しいと感じています。

**最後に今後の展開について教えてください。**

金 この活動を通じ、大人が作った居場所を子どもに「与える」のではなく、子ども「居場所を作る価値観を地域で育んでいきたい」と思っています。私たちが活動しているのは、学校ではなく地域です。地域やまちづくりのなかで、大人と子どもは先生と生徒ではなく、同じ市民です。ので、一緒に作っていきたいと思います。

子どもが声をあげてくれたことで、プレーパークから活動が始まりましたが、これからの状況

の子どもたちは、たくさん課題を抱えているのかもしれない。しかし、多くの子どもは自分の意志で今の環境を選んでるわけではないのです。善意であったとしても周囲の大人から課題越しに認識され、「あれができていない、これができていない」「これを先にするべき」などと言われると、子どもは追い詰められてしまいます。その時点で、子どもからすればありのままの自分を否定される経験になりかねません。そのようなか、子どもたちからあがった「普通に遊びたい」という声は切実だったと思います。

**活動を立ちあげるに至ったきっかけについて教えてください。**

金 地域の子どもたちから、遊びの場を求める声を聞いたことが最大の理由です。私を含めて運営メンバーはもともと島之内地域で子どもと関わる活動をしてきた経験がありました。ユニセフの調査でも、先進国のなかで日本の子どもの基礎学力は高い水準を維持していますが、精神的幸福度はワースト2位から改善したとはいえ、相変わらず下から数えた方が早い。将来や高校受験の備えも大切ですが、

によって活動のあり方は変わっていくと思います。手段や取組みに縛られず、「ありのままのいんだよ」と伝えながら当事者の希求に合った活動を継続していきたいです。10月5日に「子どもの権利」をテーマとして、初めて地域の方を対象としたイベントを開催する予定です。微力でも、今後も啓発活動をしていきたいと思っています。

## ※プレーパークとは

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場です。子どもたちの好奇心を大切に、自由にやりたいことができる遊び場を作ろうというもので、昭和15年以降ヨーロッパを中心に広がり、屋外での自由な「遊び」を通して得られるさまざまな体験や交流を通して、子どもたちに自主性や主体性、社会性やコミュニケーション能力を育ててもらいたい。そんな願いも込められています



# 社協とライオンズクラブでの 具体的な連携に向けて

## ライオンズクラブ国際協会335-B地区アラートセミナー in 大阪

ライオンズクラブは、国際的な社会奉仕団体であり、その取組みの1つに「災害支援」が掲げられています。

市社協とライオンズクラブ国際協会335-B地区は、平成31年2月に「災害時におけるボランティア支援に関する協定」を締結しており、現在ではさらに区単位での身近な関係構築をすすめています。

今回は、7月3日にホテル日航大阪で、約300人の参加のもと、「ライオンズクラブ国際協会335-B地区 アラートセミナー in 大阪」が開催されましたので、その概要について紹介します。

### 市・区社協とライオンズクラブ とで互いの強みを活かして

はじめに、335-B地区アラート委員長の樋浦二三子さんから開会挨拶、335-B地区ガバナリーの古川繁浩さんの来賓挨拶に続き、市社協の浅井俊之



▲浅井理事から今後の連携に向けた思いを伝えました

理事が挨拶しました。

浅井理事からは、「市社協の災害時における役割や、昨年度から区単位での協定締結も順次すすめており、今回具体的なライオンズクラブとの連携に向けて、参加した会員の方々へお願いしたい内容や、今後も区単位での連携を一層強化し、発災時に速やかに災害対応できる体制を構築していきたい。」と改めて今後の連携に向けた思いを伝えました。

### いざという時に備え、 日頃からの取組み

挨拶の後、335複合アラート委員・B地区アラートコーディネーターの坂本恵市さんから「いのちを守り、生き延びる力」

335複合アラート委員・A地区アラート委員長の藤之原美津子さんとB地区アラートコーディネーターの松本杜史子さんから「アラート活動における女性の力」、市社協の木下掌悟大阪府ボランティア・市民活動センター副所長と植岡大登 総務部主事から「社会福祉協議会が期待する連携の力」をテーマに、それぞれから講演しました。

坂本さんは、「ライオンズクラブの強みとして、クラブ内にあるゆる業種・職種のメンバーがいて、災害支援活動に必要な『ヒト』『モノ』『カネ』が揃っています。災害時には、被災地の復興に欠かせない存在である災害ボランティアを支えるための後方支援が求められるため、地元の社協と日頃から関係を構築することが大切だ」と話しました。

続けて、ライオンズクラブの藤之原美津子さんと松本杜史子さんは「災害時、特に女性が必要とする支援物資には、見過ごされがちなものが多くあります。同じ女性だからこそわかる



▲市社協の木下副所長(右)と植岡主事(左)から社協の機能とライオンズクラブへ協力依頼したい内容などを説明

視点で、日頃から備えておきたいと思えます」と話しました。

### 具体的な連携・協働について

木下副所長と植岡主事からは、「社協は災害ボランティアセンターの運営において、社協のみで対応できることには限界があるため、ライオンズクラブからの資機材や備蓄品、軽トラックなどの特殊車両のほか人材の協力が必要であり、災害時に備えた平時からの連携協働できる関係づくりが大切です。市・区社協が災害ボランティアセンターの訓練やイベント等をおこなう際には、ライオンズクラブの方々とも一緒に取り組みたいと考えています」とお願いしました。

最後は、一般社団法人日本ライオンズアラート委員会日本全



▲「社協とつながることで、活動のヒントにもなるため、顔の見える関係が大切」と佐々木さん



▲「社協だから把握できている情報があるため、各区単位で連携し、できる支援について考えてほしい」と西尾さん

域リーダーの佐々木健太さんから講評、335複合地区アラート委員長の西尾良典さんから謝辞、閉会挨拶があり、終了しました。

当日は24区社協から事務局長をはじめ職員も参加し、終了後にはライオンズクラブの方と名刺交換をする機会もありました。本セミナーを機に、各区単位でライオンズクラブと防災やイベント等に協働して取り組み、災害時には、互いの強みを活かしてともに支援できるよう、連携を一層強化していきます。

## 鶴見区



普段体験しないことを体験できる初めての試み

# 鶴見区障がい者スポーツ レクリエーションひろば

### スポーツレクリエーション を通してつながりづくり

鶴見区社協は、6月25日午後1時30分～3時に、鶴見区民センターつるみ日建ホールで「鶴見区障がい者スポーツレクリエーションひろば」を開催し、90人近くの参加がありました。

この取組みは、今回が初めての開催であり、区社協、鶴見区地域自立支援協議会、区内の障がい者事業者、大阪市障害者福祉・スポーツ協会との共催でおこないました。障がい者スポーツの普及や、障がい福祉関係者同士のつながりづくりを目的に開催され、区内に在住・在勤している障がい者福祉・サービスマ等の従事者や障がい当事者などの参加がありました。



▲生野区発祥のニュースポーツ「スリーアイス」

### 本気で勝負して、楽しむ

ホール内には、eスポーツやスリーアイス、フライングディスクなどのブースを設け、参加者がチームに分かれて点を競い合い、楽しみながら交流できる機会となりました。スリーアイズのコーナーでは、視覚障がいのある参加者が、スタッフの手拍子の音を頼りにボールを投げ、点が入ると歓声や拍手が飛び交い、ハイタッチを交わしながら全員でゲームを楽しみました。

また、スポーツが苦手な方も楽しめるちぎり絵コーナーも設置し、参加者全員で鶴見区のマスコットキャラクターつるりつぷの大きな作品を作成しました。

大阪市障害者福祉・スポーツ協会の福嶋尊史さんは、「今回は事



▲eスポーツではゲームを通してスポーツを楽しみました

### 参加者の声

- 施設では普段体験できなかったことで、満面の笑みで楽しむ利用者の方を見ることができました。また、開催する際には参加したいと思えます。
- 誰でもできるレクリエーション内容だったので、いろいろな人と楽しみながら交流できた。ハイタッチしている姿が印象的だった。
- eスポーツやスリーアイスなどを初めて体験できて、おもしろかった。

## 風をよむ

### ヤングケアラーの状況

大阪公立大学大学院生活科学研究科 教授 岡田 進一

最近、ヤングケアラーについての議論がよくなされるようになった。令和2・3年度に実施された「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」(厚生労働省)で、ヤングケアラーの割合は、子ども・若者全体(小学生6年生～大学3年生)の約6.8%と推計された。

令和4年度から「ヤングケアラー支援体制強化事業」が始まり、各市町村においても、ヤングケアラーに関する実態調査、関係機関での研修、支援体制の構築などが実施されつつある。そして、「子ども子育て支援法等の一部を改正する法律」において、ヤングケアラーとは、「家族の介護その他の日常生活上の世話を過度に行っている」と認められる子ども・若者」と定義された。

では、「過度」とは、どの程度のことをさしているのかというところになるが、基本的には、「過度」とは、子どもや若者に必要とされている勉強や就職

準備などの時間が奪われたり、ケアによる身体的・精神的な負荷がかなり大きくなったたりしている状態をさす。

ヤングケアラーが行っている日常生活上の世話の例としては、①障がいや病気のある親に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などを行う、②家族に代わり、幼少期にある兄弟姉妹の世話を行う、③障がいや病気のある兄弟姉妹の世話を行うなどがある。

「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」では、ヤングケアラーの多くが、家族のケアについて「ほぼ毎日」と回答していた。また、平日1日あたりのケアの時間については、平均3～7時間程度となっていた。

今後、各市町村によりヤングケアラーに対する本格的な支援がなされる必要があり、また、重層的支援体制整備事業も念頭において、将来のある子ども・若者に対して適切な対応がなされることを、各市町村に強く求めたい。

# 大阪市社会福祉大会・講演会

参加者募集!

参加費無料!

## 令和7年10月17日(金)午後2時50分～4時

※講演前に式典を開催しますので、開始時間が多少前後します。

**場所** 大阪国際交流センター 大ホール

大阪市天王寺区上本町8-2-6 近鉄線「大阪上本町」駅から14番出口から徒歩6分  
地下鉄「谷町九丁目」駅から10番出口から徒歩8分

**申込方法** 本会ホームページ申込フォームまたは電話



**申込締切** 10月15日(水)

### 「大家族－支え愛、語り愛、励まし愛」

西川 ヘレン氏 (タレント・西川きよし夫人)

タレントの妻・3人の子の母として家族を支えながら、実母と義父母と40年以上同居し、多重介護を経験。女の夢・嫁の立場・母の役割そして妻の責任。

多くの教訓が秘められた経験から、「一人で生きていけない。支えあってこそ素晴らしい人生を送ることができる」と語るヘレンさん。

その生きざまを通して、介護・家族・人とのつながり・ワークライフバランス等をテーマに、ユーモアと感動を交えながらお話いただきます。



**問合せ**

大阪市社会福祉協議会 総務部  
06-6765-5601

## 大阪府共同募金会からのお知らせ♪

### ■令和7年度NHK歳末たすけあい特別助成申請受付

申請書受付期間

年末・年始の時期に特有害な福祉ニーズや生活困難者等のニーズに応える事業に対する助成申請を受付けています。

令和7年9月30日(火)まで(必着)

### ■寄付金助成施設などの訪問 ～あなたの寄付金が役立てられているところを訪問しませんか～

大阪府共同募金会では、毎年、役員・評議員等で構成する調査指導部会の活動として、助成を受けた社会福祉協議会、社会福祉施設・団体を訪問し、共同募金の活用状況の調査、住民への公表等の指導を行っています。赤い羽根データベース「はねっと」で大阪を含めた全国の助成事業をご紹介しますが、寄付者である府民のみなさまにもっと共同募金が身近で役立っていることを知っていただこうと、この調査指導部会の活動に同行参加される方を募集しています。

申し込み受付期間

令和7年9月30日(火)まで(必着)

共通

詳しくは、大阪府共同募金会ホームページ<https://akaihane-osaka.or.jp>をご覧ください。    
【問合せ】大阪府共同募金会 TEL:06-6762-8717 FAX:06-6762-8718 Eメール:ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp